

ひょうごの遺跡

兵庫県埋蔵
文化財情報

46
号

平成15年1月20日発行

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032

神戸市兵庫区荒田町2-1-5

TEL 078 (531) 7011/FAX 078 (531) 7014

ホームページアドレス

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>

日本 最大級の 規 模 の 窯 を発見!!

神
出
古
窯
址
群

神出古窯址群は、神戸市西区神出町に所在する平安時代から鎌倉時代の100基以上の窯を持つ遺跡です。丹波焼や備前焼と共にわが国の中世窯業を代表する生産遺跡の一つで、製品は平安京の鳥羽離宮や尊勝寺などに使用された屋根瓦、さらには全国に流通したこね鉢を中心とする土器類でよく知られています。

兵庫県教育委員会では、2002年8月から国道175号神出バイパス建設工事に伴って、この遺跡の発掘調査を行っています。

今回の調査では、古代の須恵器窯として日本最大級の長さ13m・幅3mの窯跡が見つかりました。また、神出古窯址群の中で、最古の窯も発見され、同遺跡のルーツをたどる大きな手がかりを得ることができました。



1号窯は、平安時代の普通の大きさの窯です。
2つの窯を比較すると、2号窯がいかに大きいかがわかります。



■操業時の様子と名称



鴨谷2号窯は全長13m前後、幅3mの地上式の窯です。この窯では、^{わん}碗・^{つぼ}壺の他に瓦や大型の甕^{かめ}を焼いていました。年代は出土した土器の形態から、11世紀代の中頃であることが分ります。

この窯は、古代の須恵器窯の中では日本最大級の規模です。窯の長さもさることながら、注目できるのは横幅の広さです。この時期の窯の一般的な幅は2m程度であり、幅が広くなると天井を構築することが難しく、操業中の落盤事故という危険が増します。

普通、このように大きな窯を造るのであれば、柱や壁を設けて天井を支えることを考えたでしょうが、この窯にはそうした痕跡がありません。さらに、鴨谷3号窯も幅の広い形態であったことから、11世紀代に、早くも丹波焼などの中世六古窯に見られる大窯の構築技術を持っていたことが明らかになったのです。

最古の 神出古窯址群

神出鴨谷1号窯



これまでの調査成果では、神出古窯址群の土器生産は11世紀半ばと考えられていました。

鴨谷1号窯は全長5.8m、幅1.2mの地上式の窯跡です。この窯では、椀・壺などの土器を焼いていました。土器の形態などから、年代は明らかに9世紀代であることが分かります。

このことから、古窯址群の始まりは9世紀代まで大きくさかのぼることになりました。



神出鴨谷1号窯

瓦専用 の窯

窯の下半分が「マンボ（明治時代の横井戸）」の開削時に破壊されて残っていませんでしたが、残された窯の状況から、全長は約13m、幅は2.4mと推定され鴨谷2号窯とほぼ同様の規模です。

この窯の製品は瓦が中心で、窯の中には焼成に失敗して遺棄された瓦がたくさん残されていました。このうち、窯の先端部に近いところで平瓦が取り出されずにそのまま残されており、瓦の窯詰め方法を知ることができました。さらに、注目できるのは、この窯から出土した軒平瓦と同じ範で作られた瓦が平安京民部省跡から出土していることです。

年代は出土品の詳細な検討がされていないので断定できませんが、およそ11世紀中ごろと考えています。

柱穴から見える古代

石
守
廃
寺

約1,300年前の飛鳥時代から奈良時代、日本各地で豪族たちが一斉に寺院を建て始めました。中でも播磨国は郡、さらに下部の行政単位の里（郷）ごとに寺院を建てています。特に、加古川市内は集中する地域で、西条廃寺など6遺跡の寺院が存在します。

石守廃寺はその名のとおり、加古川市神野町石守に所在した奈良時代から平安時代の寺院跡です。これまでに行われた発掘調査によって、建物の配置は西側に塔、東側に金堂を持つ法隆寺式伽藍であること、一辺約100m四方の寺域の境界には溝を巡らせ伽藍の北側に複数の建物を持つことなどが分かっています。

今回、発掘調査を実施したのは伽藍の周辺部です。そのため、寺跡と言っても基壇や礎石はなく、掘立柱建物の柱穴などの穴だらけの遺跡です。一見、無秩序にある穴の中から規則的に並ぶ柱穴を見つけ、それに同方向と直角方向の並びを探していきます。図面を広げ、三角定規を片手に楽しくもあり、苦しい作業です。こうした作業を経て、遺跡の中で掘立柱建物を復元します。

新たに判明したことは寺域の東端に東門があること、そしてその東に付属施設を持つことです。さらに、伽藍の北側では大きな柱穴で造られた建物の一部を確認しました。この建物は過去の調査部分につながると東西約18m、南北約7mあり、奈良時代のものとしてはかなり大型の建物になります。柱穴の並びや間隔から推定すると、正面となる南側に通路を持ち、建物内は3ないし4室に区切られた構造になっていたようです。こうした構造の建物は、僧の住まいとなる僧坊の可能性が高いものです。



石守廃寺の伽藍北側の様子。大きな柱穴で構成される建物跡がわかりますか？

国家が建てた官寺^{かんじ}に対し、豪族が建てた寺院を私寺^{しじ}と呼んでいます。当時、地方の私寺では必ずしも僧が常駐していたとは限りませんでした。播磨国の古代寺院の中でも、僧坊が確認された例はわずかに1、2例しかありません。この僧坊の発見により、石守廃寺には数名の僧が常駐して宗教活動を行っていたと推測されます。僧坊の周辺には複数の小型の建物があり、食器や煮炊きに使った土器も発見されたことから、僧の生活の場で間違いのないと思います。また、甕^{ふいご}の一部や埴^る埴^{つぼ}・鉄滓^{てつさい}が見つかっていることから、鍛冶^{かじ}や鋳造を行う工房もあったと考えられます。

寺院は豪族の権力の象徴でもあり、国家の全国支配の意思でもあったと言われています。しかし、豪族の中には寺院の持つ特権を得るために寺を建てた例もあるようです。

国家も寺院を隠れ蓑にした不正行為に対処するため、アメとムチの政策を採っています。真面目に宗教活動する寺院を官寺と同じ扱いにして補助する制度（定額寺^{じやうがくじ}の制）を定めました。石守廃寺は先にも記したように、僧が常駐していた可能性が高く、真面目に宗教活動を行っていたと考えられます。もしかすると、定額寺制の恩恵を受けた寺院だったのかも知れません。



今回確認した僧坊跡。背後の水田にも建物はつづきます。



僧坊跡の周辺に捨てられていた瓦



寺域東側附属施設では捨てられた多量の瓦がありました。

地域文化財展
2002

古代但馬の王墓

開

催

報

告

地域文化財展は、県立考古博物館（仮称）整備推進事業の一環として、今年度から新たに始めた事業です。

内容は、「地域文化財展」・「シンポジウム」・「歴史体験イベント」の三部で構成しています。また、地域の住民が「文化財ボランティア」として企画・運営に参画できるよう、事前学習を兼ねた「養成講座」も行います。

2002年は『古代但馬の王墓』のテーマで朝来郡和田山町駅前展示館「アートほほえみ」を会場に、8月13日から9月8日の22日間にわたって実施しました。会期中の8月31日には同館「工房室」で「勾玉作り」、そして9月1日には和田山町文化会館「ジュピターホール」において『古代但馬の王墓をめぐって』のシンポジウムを開催しました。参加者並びに協力いただいた方々に、改めてお礼を申し上げます。

地域文化財展

南但馬最初の王墓と考える若水A11号墳の飛禽鏡や近畿最大の円墳茶すり山古墳の家形埴輪をはじめ、但馬各地から出土した多数の鏡・埴輪・玉製品・鉄製品・土器など主に古墳時代の出土品を集めました。そして、但馬王墓の変遷をメインに据え、Ⅰ 古代但馬の王権の成立とその変遷、Ⅱ 古代但馬の王の居館と祭祀、Ⅲ 古墳時代のくらしに構成し、併せて各テーマでは展示理解の補助となる出土品を兵庫県下の代表的遺跡から選び、展示してみました。

例えば、Ⅰのテーマでは【王権と埴輪】のコーナーを設け、但馬出土の大半の埴輪を一堂に集めると共に、埴輪の祖形とされる赤穂市有年原田中遺跡の墳墓に供献された壺と器台のセットを並べました。さらに、若水A11号墳→城ノ山古墳→池田古墳→茶すり山古墳→船宮古墳という変遷の中で、それぞれの王権を支えたであろう向山2号墳、馬場17・19号墳、梅田1号墳や東南山2・3号墳などの小首長墓も取り上げてみました。

出土文化財の有効活用を図り、歴史文化遺産（文化財）を活かしたゆとりある地域づくりに支援できたかどうか分かりませんが、但馬の先人たちのように自然に逆らわず、自然と共に生きる人々がいる限り、再び日本海地域の時代が訪れるでしょう。そのためにも、日本海へ乗りだして大陸の人たちと交流した古代人の活躍を知る必要があったと考えています。なお、延べ入館者数は2,500余名でした。

また、但馬地域の文化財ボランティアに興味がある方は、和田山町立郷土歴史館を訪ねてみてください。

勾玉作り

県埋蔵文化財調査事務所職員を講師に、21名の親子が参加しました。

展示室の本物の勾玉を観察して形を決め、約4時間かけて四角な滑石を丸く削ります。最後に、磨いてピカピカの勾玉を完成させました。お父さん、お母さんご苦労様でした。



symposium シンポジウム 古代但馬の王墓をめぐって

第1部

午前中に、県埋蔵文化財調査事務所の平田博幸と岸本一宏による若水A11号墳・茶すり山古墳の調査報告で幕を開けました。

続いて、京都大学の岡村秀典氏と奈良文化財研究所の高橋克壽氏に、それぞれ「中国鏡からみた但馬の王権」・「埴輪からみた但馬の古墳時代」という演題で基調講演をいただきました。その中で、岡村氏は但馬が日本海沿岸地域の中でも極めて鏡の出土比率が高い地域であることを特徴として示され、高橋氏は但馬が他の日本海沿岸地域と異なり、特に南但馬は埴輪からも畿内と強いつながりを持っている地域であることを強調されています。

第2部

午後からは、午前中の報告及び講演を受けてコーディネーターに徳島文理大学の石野博信氏、パネラーとして前記の岡村・高橋氏と事例報告の平田・岸本両職員、さらに豊岡市教育委員会の瀬戸 浩氏とサンテレビジョンの村上和子氏を迎え、討論を進めました。

石野氏の「城ノ山古墳を中心とした南但馬の様相」と瀬戸氏の「森尾古墳を中心とした北但馬の様相」から始まり、「王権とは何か」、「若水A11号墳と城ノ山古墳そして森尾古墳との比較」、「池田古墳と茶すり山古墳の比較」、「船宮古墳が牛形埴輪を持つ意義」、「茶すり山古墳の保存と活用」など、聴衆の方々からいただいた質問も交えて但馬の王墓をめぐり内容豊かな討議となりました。参加者は約350名です。

茶すり山古墳の現地保存が決まった今、シンポジウムの成果を生かし、活用に向けて新たな取り組みが必要になっています。今後とも、ご協力をよろしくお願いします。

また、2003年は西播磨地区での開催を計画していますので、ご期待ください。



平成14年度
企画展

発掘された兵庫の歴史Ⅰ 開催中!!

開催
期間

平成15年4月30日まで

埋蔵文化財調査事務所の2階展示室では、本年度の企画展として
「発掘された兵庫の歴史Ⅰ」を開催しています。

展示室は2室あり、第1室は「茶すり山古墳発掘速報」と「平成13年度県指定資料」のコーナーです。この夏、全国的に注目を集めた県下最大の円墳、和田山町茶すり山古墳の発掘の様子を、パネルを中心に紹介し、昨年度に県の重要有形文化財（考古資料）に指定された7件247点の出土品から、代表的なものを選んで展示しています。

第2室では、旧石器時代から江戸時代まで、県下各地の遺跡から出土した様々な出土品を、時代を追って展示しています。旧石器時代と縄文時代はじめ頃の石槍、縄文時代と弥生時代の土器や石器、奈良時代～鎌倉時代の須恵器など、時代によって変化する道具の姿を見比べてみて下さい。ご希望に応じて、展示解説も行っております。



茶すり山古墳の家形埴輪や円筒埴輪も間近にご覧になれます。



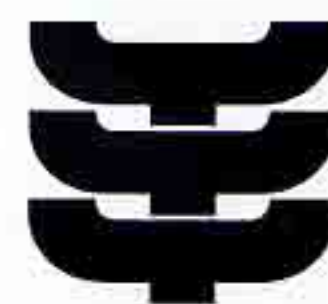
グループ・団体での見学も歓迎いたします。出土品の整理作業見学なども含め、学校での「総合的な学習の時間」などにご活用ください。

編
集
後
記

本号は秋の調査で注目された2遺跡と、夏の地域文化財展を取り上げてみました。

月日の経つのは早いもので、今年も1月17日が過ぎました。阪神・淡路大震災で、全国から支援に来ていただいた延べ121名の方々を思い出しています。

南海地震が話題に上がる昨今、北淡町震災記念公園セミナーハウスで、2月18日まで「地層に残された地震の化石を探る」の特別展示を行っています。機会あれば訪ねてください。(S.O)



文化財愛護シンボルマーク



「こころ豊かな兵庫」をめざして